31

平成12年4月8日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（二七）

第五七則　厳陽一物

〔示　衆〕

衆に示して云く、影を弄んで形に労らんとするは、形が影の本たることを識ず。声を揚げて響きを止めんとするは、声が響きの根なることを知らず。若し牛に騎って牛を覓むるにあらずんば、便是い楔を以って楔を去くとも、如何んが此の過ちを免れ得ん。

〔本　則〕

挙す、厳陽尊者、趙州に問う、一物も将ち来らざる時は如何ん（猶お是れ分外）。州云く、放下著（貼体の衣衫、須らく脱却すべきを会せよ）。厳云く、一物も将ち来らざるに、箇の甚麼をか放下せん（人は己れが過を知らず、牛は力の大なるを知らず）。州云く、恁麼ならば則ち担取って去け（喚べども頭を回らさず、争奈何せん）。

今回は、唐代の巨匠である趙州従諗が、門弟の厳陽善信に教え示した一則です。趙州さんについては、すでに第一八則「趙州狗子」や第三九則「趙州洗鉢」でご紹介し、学んできたとおりのスーパーマンです。いっぽうの善信は、江西省の省都・南昌市から西北西約一〇〇キロにある厳陽山の山中で、新興院という小寺に住して隠徳を積み、厳陽尊者と呼ばれた人です。この人は、つねに二匹の虎と一匹の蛇を従えていたといわれますから、並はずれた禅定力の持主だったようです。

その善信さんがまだ修行時代に、趙州に参じて交した「一物不将来」の問答が今回のテーマですが、この公案はのちの禅門でもよくとりあげられ、参究されています。まず、例によって〔示衆〕を意訳してみましょう。

「人は影や響きなどの末節を追うばかりで、かんじんな形や声という本元を忘れてしまっている。それは、ちょうど牛に騎っていながら他に牛を探し求めるようなものだ。それを改めるのに、クサビを打ってクサビを除こうとしても、さいごまでクサビは残ってしまう。いったいどうしたら誤りを正せるかな」。

この〔示衆〕は、つぎの〔本則〕の主旨を万松さんが独特の深い禅旨によって表現したものでしたね。ここでいわ

れる影や響きや牛などは、みな人が外に向かって道を求め、根本を忘れている例として挙げられています。そこで、こうした迷いをクサビという分別で断とうとしても、新しい分別のクサビが生じるからダメ、という意味です。では、どうしたらよいのか、そこで〔本則〕です。

厳陽「なんにも持たないハダカな本来のすがたとは、いったい何ですか。」趙州「そんなもの、肩からおろしなはれ。」「なんにも持っていないのに、いったい何をおろすのですか。」「あんた、それほど固執するんなら、どうぞ背負ってゆきなさいな。」

ただこれだけのやりとりです。言葉はいたって簡単ですが、内容は中々どうして。厳陽は、おそらくこのとき、すでにかなりの修行を積んで深い心境に至っていたようです。そこで、おのれの「一物不将来」の心境を趙州さんにたずねた。すると、趙州はそんな言葉をひっかついでいるようではダメだ「放下著」とたしなめた。ところが厳陽は、「何も持っていないのに…」と再びたずねた。

これは理屈ですね。「何も持っていない」というものを持ちまわっているのです。悪いたとえですが、泥酔者にかぎって「オレは酔ってなんかいないぞ」というようなものです。悟っても、悟りを持ちまわっていたら、もう悟りではありません。何でも同じ。本モノを得た人は、得たような顔をしないのです。万松さんのコメント「己れの過ちは自分ではわからん、牛が自力を自分ではわからんのと同じ」というのは適格な指摘。

そこで趙州は「そんなに持ちまわりたいんなら、背負っていきな」とつっぱねたのはさすがに。本文にはありませんが、この言葉で厳陽はたしかに悟った。本モノの悟りとなったのです。それはもう「一物」の有無をこえた融通無礙自在のすがすがしい心境でした。

だいたい禅門で有無がいわれるときは、具体的なモノのあるなしではなく、そうした正反対の相対立する考え方が問題にされるのです。相対的な考え方には、大小・長短などのズバリ具体的な事物を測る尺度と、善悪・憎愛などの人間的抽象的なものとがあります。前者も抽象的なものを測る場合にも使われますが、後者は具体的な事物には適用できません。

有無は便利にどんな場合にも用いられますが、禅門で問題になるときは相対的な思考分別の代表です。人間の分別の中で、有無はもっとも基本的だからです。赤ちゃんにとって、母親がそばにいるかいないかは大事件。ですから、立派な大人で有無を超えられれば、赤ちゃんのような天真爛漫の世界。それこそ仏さんとしてのいのちが活発に働いている心であり、禅の目ざす世界はここにあります。

ひるがえって、私たちはどんな「一物」も持ちまわらずにハダカで人に接することが、いったいあるでしょうか。マッサラな心になり切ったことが、どれだけあるでしょうか。わたくしは、わが身を顧りみて忸怩たる思いにかられるばかりです。初対面の人とでさえ身体の大小や性格の善悪を思ったり、相対的な知解分別におちるばかりです。

その点、わたくしの本師は一本気ではありましたが、実にくったくのない人でした。道理が合わないことをいう人に対しては、それこそ真向から抗弁。わたくしなども、ずいぶんと怒られたものです。ところが、こちらが非をさとって心からあやまると、もうあっけらかん。何のこだわりもなく、今まで怒っていたのは忘れたようにニコニコ顔になって、まるで別人のようでした。このくったくのなさは、やはり若いころからの長年にわたる雲水修行、そして良寛さんの足跡を慕う日常生活から、いつしか身についた仏徳であったと思われます。

道元禅師は趙州さんの行履（あんり）を高く評価されていますが、『正法眼蔵』仏向上事の巻で、この則のテーマである「一物をも將来せざる」道理は、釈尊が一見明星悟道の境界がそれである。とたいへん興味ぶかいお示しをされています。知解分別をこえた世界を、釈尊みずからの大悟の心とみるところに、禅門の目ざす世界のすばらしい伝統性を教えているからです。

『仏祖道影』巻二の趙州条

師姓郝曹州人自幼於本州投師披薙抵池陽叅南泉泉問那箇是沙彌主師近前鞠躬曰仲冬厳寒伏惟和尚珍重萬福泉器之許其入室一日問泉曰如何是道泉曰道不屬知不屬不知知是妄不知是無記若真達不疑之道猶如太虛廓然蕩豁豈可强名耶師於言下頓悟乃往嵩嶽瑜瑌壇納戒後往觀音院玄言布天下人皆悚然信服唐乾寧四年十一月二日右脇而寂壽一百二十歲謚眞際大師贊曰

鎮州蘿蔔東壁葫蘆庭前柏子大地標塗我趙州關你過也無指南說北打破茶鐺

龍泉院で行われる
―坐禅の手引き―

一、本堂で行じられる坐禅は、おのおのが坐蒲を持って入堂するところから始まる。ゆったりとした服装、素足で身支度をし、坐蒲を立てて両手の親指、人差し指、中指の三指で胸前に持ち①から入堂する。

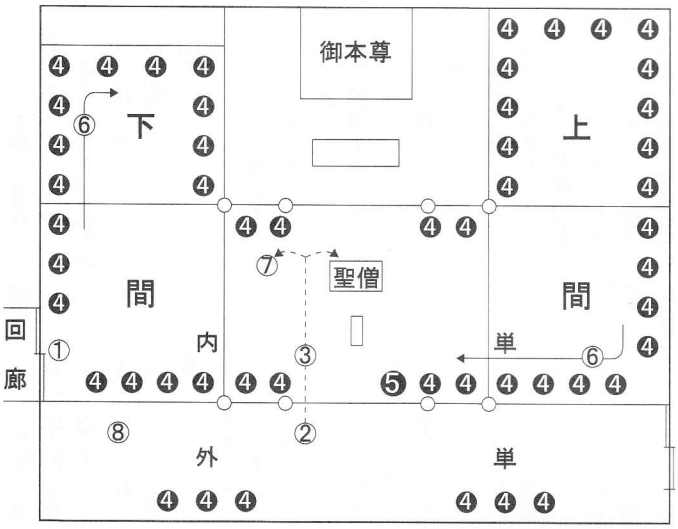
二、②の位置から、丸柱の横を左足から入って③で立ち止まり、聖僧様（文殊菩薩像）へ一礼する。柱の横から出入りするときは、常に柱に近い足から歩を進めます。

三、③から前へ進み、聖僧様の後ろからは左右の上間・下間に分かれ、自分の坐る場所である❹（単）に到り坐蒲を置く。

四、❹の単に向かって合掌一礼（隣位問訊）。右回りで後向きになり一礼（対坐問訊）し、坐蒲に腰を下ろし足を組む。足を組んだまま半回転し面壁する。腰と両膝の三点で上体を支え、背筋を伸ばして坐る。両手は足の上で印を結び（法界定印）、口は閉じ、アゴを引き、目は半眼で視線は一メートル先の床に落とす。ゆっくり左右揺身し、止めて深呼吸をし、静かに息をととのえる。

五、ご老師が入堂し、単をあらためます（検単）。このとき老師が自分の背後を通るまえに合掌し、通り過ぎたら、法界定印に戻します。やがて鐘が打たれます（三声＝止静）。ややあって、❺で口宣が述べられます。三、四〇分で鐘がなる（二声＝経行鐘）。二声目を聞いてから合掌し、軽く揺身し向き直って坐を解き、足の痺れを治す。

六、約一〇分の歩行（経行）に移ります。右に向かって立ち、手は左手をにぎり、その上に右手を重ね、手の甲を外に向けミゾオチにおく（叉手）。息をゆっくりと吐き、吸う直前に右足から足の長さの半分だけ歩を進める。以下、交互に同じ歩調で⑥の方向に足を進めます。一〇分後、鐘の合図（一声）で足をそろえ、叉手したまま一礼する。前の人に従い堂内を一周し、自分の単に戻り合掌して坐り、二炷目に入る。



七、二炷目の始まりの鐘が鳴る（止静三声）。一炷目と同じ要領で、どっしりと坐ります。二炷目の後半に老師が警策をもってまわります。警策を受けたい人は、直前に合掌して待ちます。打つ合図に右肩を軽く抑えられたら、合掌したまま首を左に傾け右肩をあけ、打ってもらいます。打たれる際、首を少し下げますが、あまり前かがみにならないようにします。終わったら再び合掌して、姿勢を正し坐り続けます。

八、坐禅を終えるときは鐘が一声（＝放禅鐘）。これを聞いたら合掌し、両手を両膝の上に仰向け、上体を左右揺身して緊張をほぐし、そのまま反転してから坐を解き立ちます。合掌して一礼（対坐問訊）、右から反転して単に向き、合掌一礼（隣位問訊）。坐蒲を持ち両手の三指で支え、右を向き待ちます。本尊様に向かって右側（上間）の先頭の者から列を作って退堂します。入堂した道筋を逆に②から①へ進みます。左側（下間）の人は上間の人の最後に続きますが、それまで⑦で待ちます。外単に坐った人は内単下間の人の後ろにつくまで⑧で待ちます。持って出た坐蒲は回廊にある坐蒲架けに収めます。

＊一炷＝炷とは線香が点されて燃え尽きるまでの時間。大体三、四〇分で一回の坐る時間。

＊冬期間は膝掛けを用意すること。

用を足す人は③、②の出入り口を通り、書院寄りの東司（手洗い）で速やかに済ます。

先達に学ぶ―第一七回成道会

お釈迦様が悟りを開かれたことを祝って、第一七回成道会が平成一一年一二月五日、龍泉院本堂で行われました。導師は椎名宏雄老師、三三名の会員が出席しました。

成道会を機に普段の生活に埋没して次第に薄れてしまう道心をかきたて、あるいは菩提心を新たにすることが仏教徒にとって大切です。

今回はご老師のご提案によって、法要の後、初めて問答が行われました。ほとんどの参加者が初めての問答に戸惑いながらも、真剣に臨みました。法話では、沢木興道老師が御提唱のとき、必ず大智禅師の発願文を読み上げます、その大智禅師のドラマチックな生涯が披露されました。要旨は次のとおり。

大智禅師（1290年～1366年）は熊本県の不知火で生まれ、幼名を万十という。幼い頃から仏教にあこがれ、七歳のときに熊本の大智禅寺開祖の寒巌禅師に弟子入りする。

出家するという七歳の万十さんがかわいいので饅頭を与えた。喜んで食べるのを見て、寒巌禅師が、万十が饅頭を食らうとは、これいかに、と質問した。そうしたら、大蛇が小蛇を飲むが如し、と答えた。そこでこの子は利発だ、才知に長けて大物になるぞと小智と名付けた。すると、小智は嫌です、大智にしてください。それで大智となったという人です。

一九歳の時、北陸加賀の大乗寺へいき瑩山禅師のもとで六年間修行。その後中国、当時の元や朝鮮へ行き一〇年振りに帰国しますが、瑩山禅師は老齢のため弟子の明峰素哲を紹介されます。明峰さんとの問答が残されています。

お釈迦様が明星をみてお悟りを開いたときに、大地有情と同時成道した。その大地有情と同時成道の本当の意味は何ですか、と明峰さんが聞きます。大智さんは、一葉落ちて天下の秋を知る、と答えた。これが禅の問答で使われる場合、ほんのわずかな自然現象にも仏法全体が現れているという意味に使われます。

それなら先生と生徒の区別はありますか、と明峰さんが尋ねた。大智さん、「あります」。それなら学生というのは何ですか。大智さん、カーッ、と喝一声。明峰さんが「ならば先生は」といったら。また大智さん、カーッ。そこで明峰さん、全て分かっていると印可証明を与えて大法相続を許した。

先生と生徒とは仮に俗世間において便宜上、相対的に言われているにすぎない。仏法の世界には相対的には対立する世界はないことを、大智さんはカーッということで表わしたのです。そして大智さんに六代の伝衣を与えた。

六代というのは、道元禅師から懐奘さん、三代目が義介さん、四代目が瑩山禅師、五代目が明峰さん、それに続く六代で、道元禅師が着用されていたお袈裟を引き継がれた。六代の伝衣という話がありますが、中国禅の系譜でいう達磨さんから慧能さんまでの六代になぞらえているわけです。だから大智さんは自分が第六代目であることを強く自覚していた。

熊本では仏教に深く帰依された菊池氏一族によってたくさんの寺が建てられており、五〇歳の時に菊池川の奥谷、鳳儀山の聖護寺に移ります。西国一山深いその寺で大智さんは二〇年間坐禅三昧。これは中国六祖慧能さんが五祖弘忍の法を受け継いでから二〇年間山に隠れていなさいと言われ隠棲します。それをお手本にしたようです。悟後の修行というか、二〇年間一歩も里へ出なかった。六九歳のときに二〇年振りに山を下り、詩をよんだ。

雲水をやめて人間世界に下っても自分は一つの鉄鉢をもっているにすぎない。無心の境地であればどこにいても山の中と同じだ、と。

この心の軽さは修行によってでたものでしょう。

その後、佐賀の秋月庵という寺に移り、正平二一年一二月一〇日に七八歳で遷化された。

要するに大智さん自身の禅というものは、道元禅師の正伝の仏法を身をもって実践することにあった。大智さんは道を求める人に欠かさず接待しながら、自分は雲水である生活を通した方です。人里へ頻繁に下りていった良寛さんとタイプは違いますが、同じように自分の性格、運を生かして道元禅師の本来の道を実践することに努めた。

老師の前へ進み出て、初めての問答

沢木老師も大智禅師、良寛禅師の精神をストレートに受け継いでいかれた方です。私たちが道をさぐるというのは、こうしたすぐれた先輩、偉いお祖師様の生き方を学ぶことに尽きます。

法話のあと、松井さん、加藤さん両典座による点心をいただきました。朝早く来られて掃除をしていた道友、石仏の写真を道友に贈られた方、前の日から添菜を用意してこられた方、たくさんの会員のお力添えで、充実した成道会を円成できました。感謝申し上げます。

観音の宿

柏市　安本小太郎

平成一一年九月末から、五泊六日で秩父三十四ケ所の巡礼を行いました。

四日目、晴。二四番から三〇番まで二七キロの予定。二五番で、先代住職の妹という六〇才位の人と仏法などについて四〇分ほど、二六番で元教師の男性と三〇分位話し合う。二七番は旨い水。

午後一時半頃、二八番橋立寺到着。本尊は馬頭観音で、百観音中、西国に一ケ所あるだけだそうです。観音経読誦後、御本尊の真言を唱える事にしておりますので、納経所で肥った七〇代の女性に尋ねると、本堂右扉の横に書いてあると教えられる。四〇段近い急な石段を登って本堂へ。右に廻って戸を引いても開かず、真言が見当りません。

相当疲れていたが、石段を降りて、くだんの女性に「鍵がかかって開かない」と言う。「戸は扉とは言わないでしょ」と答えがきた。

愛想の無い奴だ、理屈だけで生きて来たのだろうと思いながらも釈然としない。自分のミスを棚に上げて、他の所為にする普段の癖が出た。二五、二六、二七番と気分よく来て逆上せていた。徒歩巡礼は大切にされるものだとの慢心を叩かれたのだ。

その後、二九番、三〇番と終って、午後七時宿に着いた。入浴、夕食、洗濯を済ませ就寝。一炷坐ってから、前日の事をノートに書き始める。

ふっと、昨日の愛想の悪い女性は、観音ではなかったか、との念が浮かぶ。「観音は観音として現われず、様々に姿を変えて衆生を導きたもう」故大西良慶老師の観音経講話の一節が思い出された。

そう言えば、宿の予約を断った人、精進料理を頼んだが断った宿の人。暗くなった三〇番からの帰り、道に迷っているとわざわざ店を出て教えてくれた理髪店主、宿近くで道を聞いた遊び人風の男性。秩父の自然と風物。朝は頭がぼやけているので、観音経の意味を最初から順に考えながら歩いていると、急に涙が出て来て、頭がスッキリとした。これは全て観音の現われか。

平成一一年一〇月一日零時四〇分。ウンウンと頷いて、ソウカソウカと声を出し、涙を流している。沢木興道老師の「観音信仰は自分が観音に成ることだ」とはこれか。亡くなった祖父と同じ泣き方をしているのに気付く。黒住教徒だった祖父は「涙が出るようでないと、お陰は受けられない」と話していた。これも五〇年振りの有漏善種子の現行、一種の転依か。ソウカ！と膝を打って叫びたくなるが、真夜中の宿では出来ない。幾らでも言葉が出て来る。

この民宿は千手観音堂の裏にある。観音の宿「三原」、遂にここで観音に会った。観音の心で観れば全ての風物、生きもの、人々は観音である。これを浅から深へ。粗

から細へと進めていこう。
なお、民宿「三原」は二九番の近くにあり、夕食は、その場で打つ薫りあるそばで、お代わりができました。

父よ！

横浜市　里深　徳一

老人性痴呆は生命体の一種の安全装置なのかもしれない。平均年齢以上に生き、本人も十分に生きたと感じ、何時死んでも構わないと言っていても、目が見えにくくなったり、歯が上手く噛み合わなくなったり、身体のあちらこちらがおかしくなり、実際に死の足音が近くに聞こえてくると恐いものであろう。死は常に身近にありながら、それを強く自覚するようになると、恐怖を感じるのが凡人であろう。痴呆は、それを麻痺させる。

ボケにも色々な種類があるようである。アルツハイマーとか、脳梗塞による血管の狭窄とか、ボケた振りをするトボケとかである。いずれにも良く効く薬はないようである。

私の父は八七歳。母は六年前に他界した。彼の身体の方は、これといった内蔵疾患はないが、かなり進んだ痴呆である。自分の名前も時々忘れてしまう。勿論、子供や孫の名前はほとんど記憶から消えかかっている。自分が今どこに住んでいるか分からない。時々、ぶらりと出かけて徘徊する。食事をしたり、排泄はまだ自分で出来るので、そんなに手間は掛からないが、常に誰かが見ていないと、問題行動をすることがある。

年末に京都の自宅から横浜の有料老人ホームに移ってもらった。本当は同居するのが一番良いと思うのだが、諸般の事情があり、そういう格好になってしまった。

最初の三週間は会社の帰りに毎日訪問し、週末は私の家に連れてきたりしていたが、さすがに疲れてきたので、その後は二、三日おきに訪ねている。自分では親孝行などとは思っていないが、老人ホームの人には、よく続きますねと言われる（結構、預けっぱなしの人が多いようである）。私としては、同居せずに老人ホームに入れたという罪悪感と、若いころから親には色々迷惑を掛けたのに、社会人になってから海外生活が長かったため、恩返しをしていないという気持ちが強いので、生きている間は出来る限り面倒をみようと決心した次第であるが、父親の家系は長生きなので、あと一〇年ぐらいは持ちそうである。

父とのふれあいで少し分かったことは、痴呆老人の場合、理性がコントロールする記憶力、思考力、判断力は減退しているが、直感力、本能などは衰えていないのではないかということである。否、むしろ赤裸々に現れてくるように思われる。私が考えていた父とは違う面を、良い意味でも悪い意味でも見せられる。

痴呆症の人々は言語を知性によって理解するのではなく、感覚的なもので感じるようである。言葉の裏にある相手の気持ちを、本能的に感じ取るのではないかと思われる。あなたは私にとって大切な人ですよ、あなたは私を信頼して落ち着いて生活してくださいという気持ちでゆったりと接すると、ちょっとした言葉遣いにも素直に反応する。老人ホームの人が、きつい言葉で注意したり、力づくで止めようとすると、むきになって怒ることもあるそうである。

老人は、一般的に退屈で生きる張り合いがなく、楽しいこともなく、健康に不安があり、金も年金だけでは生きていくのに精一杯で、葬式代は残しておかねばならず、いろいろ考えると倦怠、物憂さに陥りやすい。所謂、老人性鬱病にかかりやすい。単調で平穏な生活は、本人が自覚的に生きていない限り、日々是好日という生易しいものではない。刺激の無さはボケを早める。しかし、厄介なことに刺激が強すぎてもボケを早めるようである。

物はいっぱいあって、今すぐ生活に困ることはないが、心の空洞はどうしようもない。この問題は、誰も解決してくれず、これに効く薬もなく、自分で解決するしかない。解決しないでボヤッとしていると痴呆が始まる。痴呆は神が老いから来る苦痛を和らげるために、老人に与える唯一の解決法なのかもしれない。しかし、この解決法を引き渡された人間は、問題を引き受けたようなものである。

痴呆にならないためには、いかに金をかけずに時間を潰すか、その方法を出来るだけたくさん考えて、自分の体力に応じてやれるように準備しておくことが必要ではなかろうか。自分は何が出来るかを、独りよがりでなく客観的に評価し、できれば社会に還元できるようなことを見つけられれば、遣り甲斐があり、痴呆になっている暇が無い。それは、何かの対価を求めてやるのではなく、心から喜

んで楽しくやるものである。心の平安と満足は、そういう行為を通じて得られるのではないかと思われる。

父の面倒をみることは、肉体的には少しきついが、私の心に満足と喜びを与えてくれる。父だけでなく、できるだけ多くの人々に喜びを与え、そのことによって自分も喜ぶようになりたいと思っています。それが仏道を実践することにも繋がるのではないかと思います。

参禅会へ参加して

―やさしくなろうとしている私―

市原市　近江　堅一

「一日は惜しむべき重宝なり」この言葉は私がはじめて参禅会へ参加したとき、椎名老師から教えていただいたものである。

二年数ケ月前のことである。それ以来、私は仕事で出かけていない限り、参禅会へ参加させてもらっている。

参加するとき、私は寺田哲朗さんの車にのせてもらっている。

最初に教えていただいた言葉のせいか私には「一日は惜しむべき重宝なり」が脳裡にしみついている。

だから、この言葉を頻繁に思いだす。

この言葉の真の意味は、一寸を惜しんで坐れのことだと思う。

毎日、三〇分は坐るように努めているが、朝早く出かけることが多いので、できないことも多い。

このような時、新幹線や列車の中で坐ろうとするが集中できない。

「一日は惜しむべき重宝なり」を私は少し拡大解釈して、後で後悔しないような時間の使い方をするように心掛けているが、中々むずかしいのである。ムダな時間を過してしまったと反省する。

このような時間をもってしまうことが凡人である証拠かもしれないが、これが緊張緩和剤となり、ストレス解消に役立っているのかもしれない。

人間にはポカッとしている時間が必要なのかもしれない。

私は想像力が人一倍たくましいので、ポカッとしている時でも、いろいろな考えが次々と湧き出してくる。

坐禅中は、この想像力を発揮し、何も考えない工夫に努めている。

「学ぶより慣れよ」という諺があるが、坐っているうちに少しずつ、何も考えない時間が増えてきている気がする。

気がするのであり、実際はそうか断言はできない。この辺が極めてあいまいでいい加減なのである。

最近、指導している中小メーカーの部長から、先生は近頃、少し優しくなったと言われる。

気のせいじゃないかと答えているが、あるいは少し変わったのかもしれない。

理解力のない人に、厳しく言ったって、響かないと悟ったのかもしれないし、私自身がほんとうに優しくなったのかもしれない。

しかし、私の最も身近にいて私のこと（欠点といってもよい）を一番よく知っている奥様が私について変わったと言わない限り、私は絶対に変わっていないのである。

とはいえ、何か私の中で変わりつつあるのは事実である。少し、優しくなったのであります。

これは椎名老師のお陰と感謝しています。

椎名老師による道元さんの教えは分かりやすく「心に響く重宝」である。

また、参禅会へ参加される方は、本音で話されるので、皆さんの話しを聞かせてもらうことも大いに役立ち、かつ、すがすがしさを感じます。

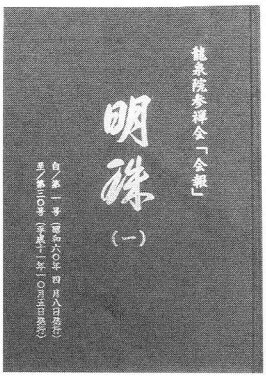
「明珠」、合冊本になる

龍泉院参禅会の会報「明珠」は、昭和六〇年四月八日に創刊されて以来、毎年春秋の二回、定期的に刊行され、平成一一年秋号で三〇号となりました。

創刊当初から毎号、一篇一篇に会員の折々の心が綴られ、真摯な姿を浮き彫りにしてまいりました。特集や節目ごとの記念号と、充実した会の軌跡となっています。

このたび会の記録保存と今後の更なる精進に資するため、バックナンバーを合冊製本して数一〇部作成しました。

合冊製本に当たっては、故人となられた元会員の政安裕良氏の奥様、芳江様より寄せられました浄財を基金とさせていただきました。また、バックナンバー不足分のコピーや製本に際して、会員のご尽力、ご協力をいただきました。深謝申し上げます。



添田昌弘氏、句集を上梓

「私には山と禅と俳句がある」という添田さん、『紙魚』の上梓おめでとうございます。

「俳句を無心に作るところに、そしてひたすら山に登ることに、坐禅と何か通じるものがある…」（あとがきより）この一〇年、天地人の選にとられた三〇五句の陰には膨大な数の句があるのでしょう。

気負いのない、どこかほのぼのとした句は、添田さんのお人柄を彷彿とさせてくれます。

沢山ある好きな句の中から…

●ものの芽と句帳に書いて野に入る（歳時記を紐解きたくなる）

●大声で幼な子笑う御慶かな（孫は可愛くてたまらない！）

●吾亦紅山一つ見え筑波山（小さい紅の花に大きな景色）

●昼の酒少しにしたり春障子（添田さんには酒もありました）

龍泉院参禅会簡介

一、**日　時**　毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）　四月は八時半より坐禅作法指導

一、**坐　禅**　止静鐘　三声　坐禅　経行鐘　二声　経行　放禅鐘　一声　放禅

一、**講　義**　木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『**正法眼蔵**』の提唱を聞く。四月より「三界唯心」

一、**座　談**　自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、**参加資格**　年齢、性別を問わずどなたでも参加できます

一、**会　費**　無料

一、**成道会坐禅**　月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月三日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする

一、**一泊参禅会**　六月一〇～一一日、七炷の坐禅とご提唱を聞く

―沼南雑記―

参禅会記録（　）中は座談の司会者

平成一一年

●一〇月二四日　三七名（吉村　有弘氏）

●一一月二八日　三〇名（宮本　茂氏）

●一二月五日　第一七回成道会　三三名　導　師　椎名宏雄老師　総幹事　小畑　節朗氏

●一二月二六日　三〇名（中嶌　宏誠氏）　龍泉院スス払い

平成一二年

●一月二三日　三五名（佐藤　友則氏）

●二月二〇日　新年会　二四名　於・芳野屋

●二月二七日　二六名（中島　達夫氏）

●三月二六日　三七名（三浦　輝行氏）

▼道元様が生まれたのが一二〇〇年。今年は生誕八〇〇年の二〇〇〇年。椎名老師を通して、道元の禅を学べるありがたさを深く思う。

▼新年会の席上、三町氏より「あなたは、その歳になって何故働くのか」の問いに「あなたはなぜ働かないのか」と答えたお話。椎名老師から、駒澤大学に七一才で修士課程に入られた方のお話。〝死ぬまで勉強である〟と。（吾亦紅）

▼新年会で椎名老師が戒律について話された。戒は自己の心をコントロールすること、律は集団の決まりごと。坐禅会は素晴らしい律の集まりだと。いかめしい感の戒律という言葉を見直してみよう。

▼有珠山が噴火した。死傷者ゼロは避難誘導の成果だが、今後は避難生活と心のケアが問題。観測・予知技術は進んでも、ひとたび自然が微動すると、人はその猛威になす術はない。地球という星には何の計らいもない。人間万能の思い上がりを反省したい。

▼介護保険制度が四月から始まった。認定やケアプラン作成の遅れから混乱が続いている。負担が増え、サービス低下の事態も起きている。家族構成の変化、親子間の意識のズレもあって問題は根深い。里深氏の稿に共鳴される方も多いことだろう。

▼前年度の年番幹事、中嶌宏誠氏と佐藤友則氏にお世話になりました。今年度は杉浦上太郎氏と武田博志が担当します。（佇泉）

●発行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116－45　☎0471(43)3131